

---

# 第 1 話

手乗りタイガー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第1話

### 【Nコード】

N2905M

### 【作者名】

手乗りタイガー

### 【あらすじ】

ちよっとシリアスですが、最終的には甘くしたつもりです。

## 運命の赤いとんかつ?! 前編 (前書き)

アニメでは大河は親元に行き、竜児達はそのまま卒業、という感じですが、この小説では大河も一緒に3年生に進級したという設定です。であしからず…。

## 運命の赤いとんかつ?! 前編

もしも、俺が…お前と出会えてなかったら……俺は今、誰となにを  
してるんだろう……その答えは……まだわからない。

〓 2月24日〓

【夜7時半】

「ねえ竜児」

俺の目の前にいるこの金髪の少女は、逢坂大河。俺の……彼女だ。

「ん???なんだ?」

んでもって、俺は高須竜児。

親父の余計な遺伝子のせいで目付きが悪い。

だから初対面の奴には必ずと言っていいほどヤンキーに間違えら  
れる。いままで何回財布を拾った………もとい、渡されたことか  
…。

そのせいで俺は、落とし物センターの常連だ。

「なんだ?」じゃないわよ!お腹すいた、ご飯作って」

普通は立場が逆なんだろうけどこれが俺達の日常なんだ。

やれやれと思いながらも

俺は大河に聞く。

「で、何が食いたんだ??」

「うゝん、そうね……最近、お肉食べてないからとんかつとか食べたいわね」

「“最近、お肉食べてない”って昨日ハンバーグを食ったじゃねえかよ」

「……う、うるさい!いいから早くとんかつ作りなさいよ!この駄犬!」

大河は恥ずかしそうに怒鳴る。

「分かった分かった。じゃあ、とんかつを……って、豚肉がねえ……」

「はあ、だからあんたはいつまでたっても駄犬なのよ!早く買いに行きなさいよ、」

「なんだ??」

大河はいかねえのかよ?」

「なっ……!そそそ、そんなに

あんたが一緒に行きたいなら行ってあげないこともないけど……//その、べ、別に私が一緒にいたいとかそんなではないって言うか//……ゴニョゴニョ//」

「はいはい、分かったから早く行くぞ大河」

そう言つて俺は、大河に右手を差し出す  
ちなみに大河の顔は真っ赤だ。

「…し、仕方ないわね…／＼」

大河は俯きながら  
左手をよこしてくる。

本当…可愛いやつだよなあ。

そんな事を考えながらスーパ―を目指して歩いていると

……………グサツ！

不意に大河お得意の  
目潰しが飛んできた

「痛つてえ！  
いきなり何すんだよ！」

「あ、あんたがさつきから  
わ、私のことエロい目で  
見てるからでしょ／＼」

「べ、別にエロい目でなんか見てねえよ！…」  
「じゃあなんでずっと私のこと見てたのよ？！」  
「そ、それは……………」

《可愛いなあって

思いながら見てた  
なんて言えねえよ!」

「言わないんなら  
また目潰しするわよ…!」

「なんでそうなるんだよ!?!」

「……………?」

大河様はご立腹のようだ。

こうなったら正直に言うしかないか……

「そ、そのだな……た、大河が……可愛いなあーって……  
だから別にエロい目で  
見てた訳じゃねえ!」

「……! / /」

大河は一瞬、驚いたような、  
恥ずかしがってるような、  
そんな顔をした。

しかし次の瞬間

…グサツ!

「いったあー! っ!!  
なんで素直に答えたのに

目潰しするんだよ!!」

「あ、あんたが恥ずかしいこと言うからでしょ!／＼」

……大河の顔は、さっきよりも真っ赤だ。

……しかし、2人の手と手は、しっかり繋がれたままだった……。

「ほら、スーパーに着いたぞ」

「さっさとお肉  
買って帰るわよ」

「へいへい」

そうして俺が豚肉を吟味していると大河がモジモジし始めた。

「行つてこいよ」

「ふえ?!……う、うん／＼……」

大河は一瞬驚いてたけど

コクリとうなずいた後、

トイレに走って行った。

やれやれ、世話がやけるな  
なんてことを考えていたら

後ろから声をかけられた

「おやおや?!そこにいるのは  
高須君ではないかぁ」

この声は……振り向かなくてもわかる身近な人物だ

「よお、櫛枝」

「なんだい、なんだい  
今日はお一人かい?」

櫛枝はどこか嬉しそうに言った。

「あ、いや大河も来てるんだ  
ちょうど今トイレに行ったよ」

櫛枝が一瞬だけ悲しそうな顔をした気がした。

「…なるほど、2人の初めての共同作業ってやつですな!」

「い、いや共同作業って言うか、ただ買い物に來ただけなんだけど  
な。それにこれが2人の共同作業だったとしても“初めて”ではな  
いな……。今まで2人で色んなことを乗り越えてきたから」

「へ、へえ、それはそれはうらやましい限りですな」

「ん??そ、そうか?」

「う、うん。そうだよ。…あと、絶対、大河泣かせちゃダメだよ!

それじゃあ、またね!!」

「ちよっ!おい、櫛枝?!」

櫛枝は俺の声に振り向きもせず走って行った。

《櫛枝、なんかあったのか??様子が明らかにおかしかったけど》

それからしばらくして、大河が帰ってきた。

「遅かったな、豚肉先に買つといたから早く帰るぞ」

「……………」

「…大河?」

俺は大河の目の前で手を左右に振ってみる

「ふえ!?!な、何よ?!」

「大丈夫か?ぼーっとして……………」

《いや大丈夫じゃないことはなんとなくわかるけど・・・》

「う、うん。大丈夫」

「本当に大丈夫なのかよ?熱でもあるんじゃない」

そう言つて俺が大河のおでこに手を当てようとすると

「や、やめてよ。本当に…………大丈夫…だから。」

大河のおでこに当てようとした手を…………弾かれた。

《…………おかしい…………大河、何かあったのか?なんか怒ってるみたいけど…………》

く 2月27日く

【昼11時】

あれから大河とギクシャクした関係が続いたまま3日が過ぎた。

あの日から大河は

高須家に来ていない。

やっぱり、話をするべきだと思う。あの日、誰と、何があったのか  
……でも大河は俺にそのことを話そうとしない。むしろ隠そう  
とする……。  
なら俺は……。

「なあ、大河……。」

学校の休み時間に、俺は大河に声をかける。

「……………な、なによ？」

大河は突き放す様に言う。

でも俺はこんなじゃ折れない

「今日、俺の家に来いよ」

大河は何かを悟った様に

「わかった、ちょうど私も話があるから……」

《今日は大河と話をしようと思ってたけど、やっぱりやめよう。……大河は話したくないのに、それを無理矢理聞き出すなんて間違ってるよな。………そのかわり、あいつを元気づけてやろう。……あの日食べられなかったとんかつを……今日こそ2人で食べよう。》

運命の赤いとんかつ?! 前編 (後書き)

後編へ続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2905m/>

---

第1話

2010年10月13日13時59分発行